

国際交渉対応推進委員会の活動



タイ国農業の特徴



水野 正己

タイ国は、マレーシア、フィリピン、インドネシアとならぶアセアン(東南アジア諸国連合)の工業化国であるが、特に、農産物の加工業とその輸出に成功したことから、新興農業関連工業国と呼ばれている。

(1) 農業生産の概要

タイ国の農業基盤は、5100 万 ha 余の国土面積のうち 41 %、2100 万 ha を占める広大な農地に求められる。これはわが国の農地面積の約 4.4 倍に相当する。この豊富な土地資源のうち、約 50%が稲作地、22 %が畑地、そして 20 %が樹園地となっている。農家戸数は 564 万世帯である。従って、農家 1 世帯当たりの経営耕地面積は 3.7ha (1999/00 年) となり、わが国の 1 戸当たり平均耕地面積の約 2.3 倍の規模を有している。

同国の国民経済に占める農業部門のウエイトは、1980 年代までは対 GDP 比率で 50 %を上回っていたが、その後の製造業やサービス業等の急速な発展により、1990 年には約 13 %、そして 2000 年には 10%まで低下した。一方、総就業人口に占める農業就業人口の割合は、2000 年で 42 %となっている。平均的な農家経営は、全所得の 6 割程度を農外収入に依存しているのが実態である。タイ国の主要農産物は、作付面積の大きい順に、コメ、キャッサバ、トウモロコシ、サトウキビ、ゴム、果樹となっている。これら生産状況はおよそ以下のようである。

コメは、同国の最重要作物である。灌漑施設が整備された地域では、コメの二期作、三期作も可能とされるが、一般的には一期作である。コメの単収は、ヘクタール当たり 2,625kg (もみ米ベース、00/01 年) である。この単収水準は、緑の革命によりコメ生産の集約化を実現した他の熱帯アジア諸国のそれと比べて、著しく低い。この理由として、農地資源の豊富さとともに、量よりも質に重きを置いた輸出指向型のコメ生産が行われてきたことが挙げられる。ベトナム等からの低質米輸出の増加に伴い、近年はこうした傾向にいつそう拍車がかかっている。このため、輸出市場で人気の高い香米の生産がコメ生産の約 2 割を占めている。コメの輸出量は年間 600 ～ 700 万トン (精米ベース) で推移している。これはコメの総生産量の 23 ～ 32 %に相当する。

キャッサバはコメや天然ゴムとならぶ重要輸出農産物であり、近年の生産量は 1600 ～

1800万トンの水準にある。国内消費はその3割に過ぎず、残る7割が飼料、スターチ、化工でん粉として輸出されている。同国では、将来的にはキャッサバのアルコール原料としての利用も検討されている。トウモロコシは、1970年代にはわが国や欧州市場向けに輸出されていたが、同国内の畜産業の発展に伴い輸出は影を潜め、ブロイラー等の国内家畜飼料用として消費されている。サトウキビの生産量は約5000万トン（00/01年）であり、これから一次精糖を行った粗糖の生産は約2000万トンに達する。わが国へはこの粗糖が輸出されている。対日輸出量は2000年には78万トンに達し、同国最大の輸出市場となっている。天然ゴムは、240万トン（01年）の生産があり、米およびエビ類と並ぶ3大輸出農水産物の一角を形成している。果樹生産の中では、パイナップルの占める位置が大きい。タイは世界一のパイナップル生産・輸出国であり、総生産量約230万トン（00年）の8割が缶詰、冷凍、原料用加工仕向けである。

（２） 食品輸出の動向

タイ国の食品輸出は総輸出額の1割強に達している。輸出相手国は、全食品輸出額の22%（00年）を占めるわが国を筆頭に、アメリカ、シンガポール、香港、オランダ、インドネシアと続いている。同国の食品輸出は、コメ、キャッサバ、トウモロコシ等を中心とする穀物・飼料の輸出から、近年は経済発展による労働賃金等の生産コストの上昇の結果、加工食品等の輸出にシフトしつつある。1997年にアジア諸国を襲った通貨・経済危機はバツ安をもたらし、タイ国の農林水産物の国際競争力を回復させた。

わが国への食品輸出は、日系企業による直接投資および開発輸入の結果、野菜・果実加工品、水産製品（エビ、イカ、タコ、魚の調整品、すり身等）、鶏肉加工品（冷凍鶏肉、鶏肉調整品）、米加工品（あられ）、化工でん粉等が増加傾向にある。また、WTO協定下でのコメのミニマムアクセスにより、1995年以降、10～14万トンのコメがわが国に輸出されている。

（３） 農業・食料生産をめぐる問題点

タイ国の農業ならびに食品産業の今後の動向をみていく場合、留意すべき点は以下のとおりである。

現在のところ、タイの農業・食料輸出は、長期の経済不況によるわが国への輸出減少にもかかわらず、好景気に支えられたアメリカ向け輸出の増加や、口蹄疫・狂牛病の発生に見舞われたEUへの輸出急増により、好況を呈している。しかしながら、その一方で、同国の食料・農水産物輸出は、大きな転換期を迎えているといつてよい。その背景として、中国およびベトナム等のアジア諸国との国際競争力の激化による輸出食品の高品質化・高付加価値化の要請、日米市場への過度の依存から中国、アフリカ、東欧諸国等の新たな輸出市場の開拓の必要性、WTO体制下での輸出関税引き下げや衛生基準および検疫等のいわゆる非関税障壁への対応の必要性、水産物の生産における資源枯渇やエビ養殖における環境問題・病気の発生等が挙げられる。

つぎに、主要作物の生産の立地と作物適性度（用水条件および土壌条件に基づいて同国農業・協同組合が公表）との関連性をみると、1970年代から90年代の期間では、両者の適合性が高い作物群（サトウキビ、ダイズ）と、両者の適合性が低い作物群（トウモロコシ、キャッサバ）、適合性が中位の作物群（雨期作のコメ）が認められる。これにより、同国の代表的農産物であるトウモロコシやキャッサバといった作物については、農業環境適合性の面から生産の持続可能性が懸念される。

さらに、最近の調査結果によれば、農業生産の商業化ならびにグローバル化が全国的に浸透しつつあり、その結果、北タイの農村地域においてすら若年層を中心に農業離れや農村離れが進行し、一部に農業労働力の不足すら生じている。こうした脱農化傾向が今後の同国の農業生産に与える影響も懸念材料の一つとなっている。